

新建築「住宅特集」1998年11月号抜粋
七里ガ浜の木箱

「住む」ことイマジネーションの構想力

なぜか惹きつけられる住宅がある。先日、体験する機会を得た。その住宅は建築家の自邸であり、さまざまな工夫がされた生活のためのしつらえはさすがに敬服するものであった。しかし、そのことが私を惹きつけていたのではない。しつらえを取り除いたとき現れる荒々しいコンクリートの簡素な箱が、「住む」とい構想力を感じさせていたからだ。

建築家は生活の専門家ではない

われわれは、欧米の生活スタイルを懸命に取り入れようとしてきた。住まいの近代化が急速に進んだ高度経済成長期には、生活とその容れ物としての住宅との関係が歪んだものとなった。事実、私が育った子供部屋には、6帖の和室にカーペットが敷かれ、勉強机と椅子が入り、ベッドがあった。床の間に置かれた本棚が示すように、生活のスタイルと住宅とは誰が見てもバランスを欠いていた。このような状態を批判的にとらえるのではなく、アンバランスな暮らしを経験したことこそが、現在の住宅を考えるうえで重要な意味をもつのだと私は思う。その体験により、住宅は生活の変化に追いついていかないことを誰もが理解し、住宅と生活とが一致していなければならないという拘束感を弱めた。またそのような状態の心地よさを知り不一致を受け入れる柔軟性をわれわれは身につけた。過去にとらわれない軽やかな生き方と、現在の住空間を自分自身で考える少しの自由を得たのだ。近頃の建築家による住宅には生活スタイルが見えないという批判はある。しかしそれは特定の生活スタイルにとらわれた視野からの批判であるといえる。確かに建築家は生活にかかわらねばならないのは当然である。しかしこのことは日々の生活に細かく対応することではなく、特定の生活スタイルを可能にする住宅をつくることでもない。建築家は生活の専門家ではない。ハードウェアとしての住宅の専門家である。多くのことに対応できる「も

の」としての住宅を示すことによって、住まい手が自分の生き方に合った住まいを可能にする。住宅を商品として考える現在においては、「住む」という意識が希薄になっている。この状況においては住まい手が「住む」ことの構想力を沸き立たせ、「住む」ことに能動的になることが必要なのだ。そのための住宅をつくるのが建築家に求められている。室内に置かれている水屋箆笥や、コンランシヨップのダイニングテーブルや椅子を住い手が自分の趣味で選んだ。それらが生活に合うか合わないかは住い手が決める問題である。住い手は、床にワックスをかけ、壁にペンキを塗り、柱の間に棚をつくり、庭に枕木を敷いた。また、屋上への階段や手摺を自ら設計していてもいる。つまり、どこまでが設計者による設計なのか不明である。どの時点で住い手が完成するのは私にもわからない。このように変わりつづける住まいを成り立たせる容れ物が本当の意味での住宅ではないか。

海を望む木箱

建主は住宅から海が見えることを第一の条件としてこの土地を得た。だから海に開く西側に大きな開口を設けた。日照を得るために南側に建つ家を避けるように東西の端にふたつの3問角の箱を置いた。結果として中庭的な外部空間ができ、この2世帯住宅の要素をもつ住宅は各スペース間に適度な距離を生んだ。箱は中庭にも開いて、外気を十分に取り入れると共に、奥の箱(東側)からも海が見えるようにした。

海への眺め、中庭への開放、また駐車のために大きな開口を得る必要があり、問口方向は方杖構造とした。方杖構造を構成する柱と方杖は2"×8"材を、梁は2"×10"材を3枚重ねてつくった。それらの接合はボルト締めした。柱は北側斜線のために一部折れ曲がり、また方杖の取りつく位置は床梁では内側に、小屋梁では外側としたので変形したフレームとなった。桁行方向は厚さ29mmの構造用合板で軸組を固めた。南側にも開放的な窓を得るためと、問柱や胴縁を用いないで構造用合板を直張りするためにフレーム間隔を909mmとした。床と屋根も同様に根太と垂木を使用せずに同

じ合板を張り水平の剛性を得ている。変形したフレームと構造用合板とで箱が構成されている。

外壁は構造用合板の上にウレタンフォーム付きのガルバリウム鋼板角波を張り、断熱性と耐久性を確保した。開口部はコストパフォーマンスを考慮して麗製の引き違いアルミサッシュを用いた。開放度が高いので全室温水の床暖房を施した。

基礎はベタ基礎として最下階の床を兼ね、立ち上がりは室内に現れる。内部仕上げは床の板張り以外になく、柱、梁、構造用合板が露出する。すべての構造が明らかになり、剥き出しの木の箱が現れる。その木箱は「もの」としての住宅を強く意識させ、「住む」という構想力を誘発するのだ。

